

中つ巻 応神天皇

五、国主の歌・百済の朝貢

一、吉野の国主等 よしの くずども 神武の段に「吉野の国巢」と既出（九四頁）。大和の古い土着民たるクズは独自の呪力をもつとされ、それを介して宮廷との間に特殊な因縁を有していた。ここに出てくるのも、前段に天皇、「豊明」のとき「いざ子ども、野蒜摘みに」と歌ったとあることに因んでのことであろう。クズの出番は、「豊明」つまり饗宴をとまなう宮廷の神事・節会であつた。

二、品陀の ほむだ おおささぎ 日の御子 大雀 応神の御子たる大雀命。「大雀、大雀」と繰り返したのは、いやが上に称えたもの。

三、本つるぎ 未ふゆ 「記伝」にはツルギはツムガリの約で「もと刀の物^{たち}を利^とく截断貌を云る言」で「未ふゆ」のフユは振ル^ふだというのを始めいろいろの解釈があり定説を見ない。ただこれは対句であり、ツルギとフユは大刀のつばもとと、きつさきにかかわる動詞であろう。剣^{つるぎ}は「吊佩き」の約なりと『言海』はいう。従つて「本つるぎ」を鞘の本を吊り佩く意とするのが良いと思う。

古代の貴人が緒を長くつけて大刀を膝のあたりまで垂らしていたことは、法隆寺の聖徳太子像などからもうかがえる。武烈紀には「大太刀を垂れ佩き立ちて」とあり参考になる。

また、下句「未振ゆ」は、先の方がゆれ動いている意と解される。さらに「未ふゆ」のフユを「氷^ひゆ」の転と見る説にも心ひかれる。

四、冬木^の如^{した}す からが下樹^{したき}の さやさや

原文・「布由紀能須 加良賀志多紀能 佐夜佐夜」

難句である。「冬木の すからが下木」（「厚願抄」）との句切りの読み方も膾炙^{かいしや}している。この場は「記伝」に同じ。因みに冬はヒユ（冷）に由来する。それに対し夏はアツシ（暑）のアツの変化形であろう。カラも「枯」より「幹^{から}」と見る説をよしとする。いづれにしても難句であり、一首全体を未詳歌とする例もある。

五、まろが父^ち 「吾兄^{あせ}を」「吾子^{あご}よ」などと同類のはやし詞である。仲哀記の歌「……献

り来し、御酒ぞ、あせず食せ、ささ」（一五五頁）の「ささ」もはやし詞であった。しかしこの「まろが父^ち」はたんなるはやし詞ではなく、宮廷のあるじに対しわが父よと呼びかけたものである。マロは男子の一人称代名詞。平安朝になるとマロは男女の自称としてひろく用いられるようになるが、それ以前にはこの一例あるのみである。安麻呂、仲麻呂、古麻呂などとそれ以后男子の名の下にマロをつける例がすくぶる多くなる。ここでクズが「まろが父^ち」と呼びかけているのは、クズの宮廷にたいする隷属関係の深さがうかがえる。王権は父権的な制度であり、したがって王は人びとにとって比喩的に父であった。その王にたいし「まろが父^ち」と呼びかけているところにクズの宮廷への特殊な従属関係が示されていると思う。

六、国主等大贄^{どもおほにへ}を献^{けん}る時時^{ときとき} ニへは神や宮廷に献ずる食べもの。クズが贄を献ずること

は、「貞観儀式」や宮内式にも「凡諸節会、吉野国栖献^ニ御贄^ヲ一奏^ニ歌笛^ヲ」とある。「時時」とは時毎にということ。

七、海部^{あまべ}、山部^{あまべ}、山守部^{あまべ}、伊勢部^{いせべ}

○海部は海人部とも記す。海で漁^{すなと}りし藻塩焼くなどを業とするのがアマだが、アマベは、それが宮廷に従属する部民として組織され、魚貝類をニへとして貢納するものこと。

○山部は「記伝」には「山部と、山守部と、ニツはあらず。同じ物と聞ゆるを、此^{こゝ}に別に挙たるは、いかにぞや、書紀に、山部は無きぞ正しかるべき」とある。

○「あしひきの山行^ゆきしかば山人^{やまびと}の朕^{われ}に得^えしめし山づとぞこれ」（万二〇・四二九三）（あしひきの山を通^{いづみ}っていったら、山人^{みやぎ}が私にくれた山のみやげですよ、これは）

○「宮材^{みやぎ}引く泉^{いづみ}の柚^{そま}に立つ民の休^{やす}む時なく恋^{こひ}ひわたるかも」（万一一・二六四五）（宮殿の材木を切^きって引き出す泉の柚山で働く民のように、休む間もなく恋し続けていることだ。）

○「大君^{さか}の境^{さか}ひたまふと山守置き守るといふ山に入らずは止まじ」（万六・九五〇）（大君が境界を定め給うとて、山守を置いて固く守っている山に、私は入らずにはおかない）と、山守は無断で侵入するものを監視する山番であった。

○伊勢部はここに見えるだけで他に所見なし。だがそれは磯部^{いそべ}であって、漁獵を職とする部に違いなからう。その伊勢の漁民が宮廷に所属していたことは、上巻のサルタヒコにまつわる話（七三頁）などからも疑いなきことである。

八、劍池^{つるぎのいけ} 孝元天皇の条に、「御陵は劍池の中の岡の上に在り」と既出（二〇八頁）。こ

こにそれを「作る」とあるのを、「此^こは旧^{もと}より有しが、頽^{そこな}はれたるを、修理^{つくろ}ひ直されたるを、作^{つく}る

とは云ならむ」(記伝) といっている。

九、新羅人云々 しらきひと

ここには「新羅人参渡り……百済池を作る」とあるのにたいし、紀には「七千秋九月、高麗人、百済人、新羅人、並に来朝。時に武内宿禰に命して、諸の韓人等を領ゐて池を作らしむ。因りて、池を名けて韓人池と号ふ」とある。ここで新羅人を作らせたものを百済池というのは奇妙である。古事記には外国の名は新羅と百済しか見えず、高句麗も任那も出てこない。百済池の所在は不明。この時代、池水土木工事は多く、渡来族の技術に負うものであったので百済池といったまでのことであろう。

十、堤池に役ちて えだ

堤を築き池を掘らすこと。原文・「為^レ役^ニ之堤池」の役の字、諸本「渡」とあるが、「記伝」はこれを延佳本により「役」の誤りとして正している。

十一、牡馬壹疋、牝馬壹疋 をまひとつ めま

応神紀十五年の条に、「百済の王、阿直伎を遺して、良馬二匹を貢る。即ち輕の坂上の厩に養はしむ。因りて阿直伎を以て掌り飼はしむ。云々」と見え、この記事と照応する。馬は古く大陸から導入された動物であり、縄文遺跡からその骨や歯が出土するが、それらは中小型だとされる。「魏志倭人伝」に「その地には牛馬なし」とあるのに留意するべきである。

十二、手人韓鍛 てひとからかぬち

手人は手の技術者。書紀には「百済の献れる手末の才伎」(雄略紀七年)、とある。この手人は下の「韓鍛」「呉服」の双方にかかる。

○韓鍛のカラはもと古代南朝鮮の伽羅国のいいであったが、後には朝鮮半島全体をさす名となり、やがて隋唐と交わるに及び中国をもさすに至った。カヌチは金打の約だが唐鍛に対し、在来の倭鍛という。韓鍛が新しい製鉄冶金の術をもたらしたので、かくいうわけで、天の岩屋戸の段には「鍛人天津麻羅」の物語が語られている(四〇頁)。

十三、呉服 くれはとり

ハトリはハタオリ(機織)の約、呉は三世紀ごろ江南の地にあった国の名。

それは当時における漢人文化の中心であった。呉音と呼ばれる漢字音——「行」をギョウ、「家」をケとよむ類——が奈良朝以前から伝わっているのを以てして、この地との文化的交渉の古いことを知りうる。

了